様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月　 ２ 日現在

機関番号：３２５１７
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３７０５７１

研究課題名（和文）there構文の通時的研究

研究課題名（英文）Diachronic Studies in there-construction

研究代表者
藤原　保明（Fujiwara, Yasuaki）

聖徳大学・文学部・教授

研究者番号：３００４００６７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：　There is a tower in Tokyo のような存在を表す there 構文の成立の過程と年代、there の機能と挿入の動機を解明した。この構文は In Tokyo is a tower から始まり、前置詞句に代わって there が14世紀末までに挿入され、In Tokyo there is a tower となり、最後に前置詞句が後方に移動し、15世紀中頃までに確立した。形式主語の there の根拠は、thereafter などの there と同様、この語が指示詞の tha (=that) ＋ -r（副詞の語尾）に由来し、その機能を維持していたことにある。

研究成果の概要（英文）：The result of this study is that we were able to clarify the motivation of "there" behind its use and function as a formal subject as well as the period and the process of the establishment of "there-construction." The construction like "There is a tower in Tokyo," which indicates the existence of someone or something, started in the form of "In Tokyo is a tower," then "there" was inserted instead of the prepositional phrase which was unbable to be a subject, as in "In Tokyo there is a tower," by the end of the 14th century, and finally, the construction was complete by the middle of the 15th century after the prepositional phrase moved behind the logical subject. The reason for "there" as a formal subject is due to the fact that "there" is derived from the demonstrative "tha" (=that) + "-r" (adverbial ending) and retains its original function, as "there" in "thereafter" (=after that) and "therefore" (=because of it) does.

研究分野：英語史

キーワード：there 構文　形式主語　there の機能　there の挿入　前置詞句　意味上の主語　指示詞

１．研究開始当初の背景

「～がいる・ある」という事物の存在の意味を表す文(以下､存在文または there 構文）の形式上の主語（または虚辞）の there は場所の指示副詞 there に由来するとみなした場合、副詞が主語になり得た理由、および there 構文の成立の過程と時期の説明が必要となる。ところが、これらの点に関する従来の記述は散発的に生じる虚辞の所在の指摘程度に留まっていて､存在文の there に係る疑問を解消するに至っていない。

そこで、研究代表者は 15 年ほど前から古英語と中英語の代表的な韻文と散文（主に『ベーオウルフ』、チョーサーの『カンタベリー物語』、マンデヴィルの『旅行記』）における there の音韻・形態・統語の研究に取り組み、その成果を「チョーサーの存在文」、「Existential Sentences in *The Canterbury Tales*」、「there はいつ存在文となったか」、「14 世紀末における there の文法上の機能」という 4 件の論文に発表してきた。

その中で、古英語の場合、韻文でも散文でも、場所を表す副詞の þǣr ‘there’ は他の時や場所の副詞と同様に動詞の直前に生じるのが一般的であることから、虚辞への発達の可能性はあったことを指摘した。

一方、14 世紀末のチョーサーの作品では、虚辞には語源的で無語尾の ther が対応し、場所の副詞には -e を伴う there が対応する例が多いことから、there 構文がかなり発達していると思われる。しかし、チョーサーとほぼ同じ頃の散文『マンデヴィル旅行記』(コットン版とボドレー版）の場合、動詞に先行する位置では there よりも場所の前置詞句の方が圧倒的に多いことから、there 構文の発達は過渡期にあることを指摘した。もっとも､虚辞の there と断定できる例が皆無に近い写本もあることから、there 構文の史的発達の解明には写本による変動の可能性も考慮に入れねばならないことも示した。

そこで、このような予備的な研究成果を踏まえて、there 構文が確立していると主張するのに必要な条件を設定した。それは、George Orwell の *Animal Farm* (1945) の例を挙げて示すと、次の 2 点のいずれかとなる。

(1) ① *There* was nothing <u>there</u> now except a single Commandment. のように、同じ節の中に斜字体で示した「虚辞の there」と、下線で示した「場所の there」が共起していること。

② And among us animals let *there* be perfect unity, perfect comradeship in the struggle. のように､斜字体で示した there が名詞（句）や代名詞と同等に、動詞の目的語（または、小節（small clause）の主語）としても用いられていること。

２．研究の目的

上記のような 2 つの条件のうち､いずれか、または両方を満たす存在文は「虚辞の there ＋動詞＋主語＋場所の副詞・前置詞句」という鋳型に当てはまる。動詞は be を主とする自動詞が一般的であり、主語は原則的に不定名詞句である。存在文のこのようなさまざまな制約の根拠は、現代英語を対象とした共時的研究では説明できず、鋳型の形成過程も解明できない。そこで、本研究では通時的観点から there 構文を分析し、鋳型の形成過程とその時期を解明することを目的とした。

３．研究の方法

There 構文の成立の過程とその時期を特定するためには、分析対象となる文献の作成年代がかなり明確になっている必要がある。この点に関して言えば、同じ内容がその時々の英語で翻訳されていて、成立年代が明確な「聖書」(具体的には「ウィクリフ派訳聖書」(1395 年）､「カヴァデール訳聖書」(1535 年)、「ジュネーブ聖書」(1560 年)、「欽定訳聖書」(1611 年)）を分析対象とし、１．の (1) の条件に当てはまる there 構文の有無を確認し、その結果を踏まえて、there 構文の成立の過程と年代を明らかにした。

「聖書」はいつの時代であれ、ヘブライ語とラテン語からの英訳であり、それゆえ語法や表現が保守的にならざるを得ないという特徴があると思われる。それゆえ、分析段階では、上記の聖書と年代的に近くて、しかも当時の口語にも近い文献として『パストン家文書』(1425-1510 年）を対象とした。

分析の最終段階では、現代英語の小説 2 点 (Lafcadio Hearn の *Kwaidan* (1904 年）と George Orwell の *Animal Farm* (1945 年)) から例を抽出し、there 構文の発達の状況を確認した。いずれも、様々な場所で物語が進行することから、存在文が多く用いられていると予想されたからである。

なお、準備段階の分析で用いたチョーサーの作品以外の『トロイラスとクリセイダ』(1382－5 年頃）および『マンデヴィル旅行記』の写本のうち、欠損版については新たに分析対象に加えた。

４．研究成果

天地創造の折、神が「光よあれ！」と言うと明るくなった。この神の文言は「欽定訳」では (1) の ① のように 虚辞の there を用いて表されていて、この there は (1) の ② と ③ の例からも明らかなとおり､let の目的語となっていて、名詞句や代名詞と同等であり、場所の副詞ではない。さらに、このことは (1) の ① 2 つ目の there についても当てはまり､この there も虚辞とみなせる。

(1) ① And God said, Let *there* be light: and *there* was light. (i. 3)

② And God said, Let *the waters under the heaven* be gathered together unto one place, (i. 9)
③ … and let *them* be for signs, (i. 14)

(1) の there は「カヴァデール訳聖書」(1535 年) と「ジュネーブ聖書」(1560 年) でも同じように用いられていることから、虚辞の there の用法は1535年には確立していたことがわかる。ところが、「ウィクリフ派訳聖書」(1395 年頃) では (2) のように there は一切用いられてはいない。

(2) ① And God seide, Liȝt be maad, and liȝt was maad. 'And God said, "Light be made, and light was made."' (i. 3)
② Forsothe God seide, The watris, that ben vnder heuene, be gaderid in to o place, 'Truly God said, "The waters, that are under heaven, be gathered into one place,"' (i. 9)
③ … and be tho in to signes, 'and let them be in as signs,' (i. 14)

「ウィクリフ派訳聖書」の創世記では there は 58 例用いられているが、there 構文の鋳型に合致するのはわずか 1 例であり、他の there はすべて先行の場所を受ける副詞である。しかも、鋳型に合致する 1 例でさえ、前方照応的な場所の副詞である。それゆえ、英訳聖書の英語に関する限り、虚辞の there の出現は 1395 年から 1535 年までの 140 年間のいつ頃かということになる。ちなみに、欠損版の『マンデヴィル旅行記』(1385 年頃) の場合、454 例の there のうち、(3) の 2 例では同じ節内で þer, þere, þare 'there' が繰り返し用いられている。いずれも、2 番目の there には虚辞の可能性があるが、その他に存在文の証拠となりうるものは見当たらない。

(3) ① for *þere* growiþ moneye olyues <u>þare</u>. 'for there grow many olives there.' (p. 40, l. 5)
② but ȝit *þer* be <u>þer</u> many of ham. 'but still there are many of them there.' (p. 124, l. 1)

一方、『パストン家文書』(1425-1510 年) では、(4) の ① のように there が let の目的語となる例や、(4) の ② のように同じ節内で there が共起する例が何回も生じ、さらに興味深いことに、(4) の ③ のように here の共起例も生じている。いずれも、日常の口語に近い手紙の中に生じる例であることから、15 世紀中頃には虚辞の there は確立していたものと考えられる。

(4) ① let *ther* be but few woordys of thys perdon. 'let there be but few words of this pardon.' (1471 年 7 月 22 日)
② and so it semyth *there* is myche to doo <u>there</u> be the Erle of Penbrook. 'and so it seems there is much to be done there by the Earl of Pembroke' (1462 年 9－10 月)
③ Also, *here* was <u>here</u> with me yesterday a man fro the Priour of Bromholme 'Also, here was a man from the Prior of Bromholm here with me yesterday' (1476 年 3 月下旬頃)

以上の分析結果を総合すると、古英語と中英語の後期までは there 構文は現在のよう確立しておらず、動詞を修飾する時や場所の副詞または前置詞句が動詞の直前に生じると、主語はその動詞の後ろに来るというのが一般的な語順であった。ところが、中英語の後期頃から語順が確立し始め、動詞の直前は主語の占める位置であるという認識が強くなってくると、動詞の直前にある時や場所の副詞または前置詞は語順の原則に反することになり、その代わりとして there を挿入し始めたと考えられる (There の挿入の動機は次の段落で詳細に述べる)。場所の副詞や前置詞句はその後、文末へと移動し、there 構文が完成する。

There が名詞や代名詞と同様に主語や動詞の目的語になれた理由は以下のとおりである。「予備の it」や「虚辞の it」のように、it は形式主語として用いられるが、これは it は代名詞であることから、主語や目的語として用いられても当然であるが、there は場所の副詞であることから、他の副詞または副詞の機能を果たす前置詞が主語になることには無理がある。この問題の解決の糸口は thereafter, therefore, thereon のような複合副詞から得られる。すなわち、これらの複合語はそれぞれ、'after that', 'for it', 'on that, on it' という意味を表わし、 there は後置詞の目的語として、場所の副詞ではなく指示詞の機能を担っている。これらの複合語はすでに古英語から用いられていて、しかも中英語でも新たに作られていることからすると、there の起源は場所の副詞であるとは限らないと思われる。事実、there は古英語では þǣr (= ther) であり、これは印欧祖語の þā 'it, that' + -r (副詞の語尾) までさかのぼれる。したがって、therefore などの複合語の there には本来の指示詞の機能が維持されていて、単独で用いられた there の場合にも本来の機能が内在化していると考えられる。

このように、本研究における豊富な資料の綿密な分析の結果、難題となっていた there 構文の成立の過程と年代についてより明快な説明を施すことができた。There が名詞や代名詞と同様の機能を担うことになった経

緯や動機にも、語源の情報を活用して納得のいく説明を与えることができた。いずれも、英語史の研究に資するところが大きいと思われる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 10 件）

① 藤原保明、英語の存在文の there の文法化、聖徳大学研究紀要、査読有、27 号、2017、43−50

② 藤原保明、詩のリズムと押印の制約、英語発音・表記学会、『英語の発音と表記』、査読有、9 号、2016、1−24

③ 藤原保明、「ちりめん本」研究に向けて、大塚英語教育研究会、*Otsuka Review*、査読有、34 号、2016、70−85

④ 藤原保明、複合名詞における man の母音弱化、近代英語協会、『近代英語研究』、査読有、32 号、2016、21−39

⑤ 藤原保明、英語に借用された日本語の表記と発音、聖徳大学研究紀要、査読有、26 号、2016、69−76

⑥ 藤原保明、*Kwaidan* の there と存在文、聖徳大学大学院言語文化学会、『言語文化研究』、査読有、14 号、2015、1−19

⑦ 藤原保明、英語に借用された日本語の通時的研究、大塚英語教育研究会、*Otsuka Review*、査読有、33 号、2015、37−48

⑧ 藤原保明、There 存在文の史的発達過程、金星堂、『チョーサーと英米文学』（河崎征俊教授退職記念論集）、査読有、2015、380−401

⑨ 藤原保明、英語の高段長母音の短化の要因、英語発音・表記学会、『英語の発音と表記』、査読有、8 号、2015、1−15

⑩ 藤原保明、等位表現における強勢音節とモーラの機能について、聖徳大学研究紀要、査読有、25 号、2015、69−75

〔学会発表〕（計 6 件）

① 藤原保明、大母音推移再考―目的論的アプローチ、英語発音・表記学会第 21 回大会、2016 年 7 月 2 日、茨城キリスト教大学（茨城県日立市）

② 藤原保明、詩のリズムと押印の制約、日本英文学会第 88 回大会シンポジウム第十部門「中世頭韻詩の通時的・共時的研究の現状と課題」、2016 年 5 月 29 日、京都大学吉田キャンパス（京都府京都市）

③ 藤原保明、存在文の there の文法化について、日本中世英語英文学会第 31 回全国大会、2015 年 12 月 5 日、慶應義塾大学三田キャンパス(東京都港区)

④ 藤原保明、英語に借入された日本語の発音と表記、英語発音・表記学会第 20 回大会、2015 年 7 月 4 日、茨城キリスト教大学（茨城県日立市）

⑤ 藤原保明、中英語後期の there 構文―『トロイラスとクリセイデ』を中心に、日本中世英語英文学会第 30 回全国大会、2014 年 12 月 7 日、同志社大学今出川キャンパス（京都府京都市）

⑥ 藤原保明、英語の高段長母音の短化の要因、英語発音・表記学会第 19 回大会、2014 年 7 月 5 日、茨城キリスト教大学（茨城県日立市）

６．研究組織

(1)研究代表者

藤原　保明（FUJIWARA, Yasuaki）
聖徳大学・文学部・教授
研究者番号：30040067